

山科本願寺の石風呂

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



調査で見つかった石風呂の遺構（北から）

はじめに 2012年夏、浄土真宗中興の祖・蓮如上人が創建した山科本願寺跡の発掘調査で、石風呂の遺構が見つかりました。見つかった場所は、阿弥陀堂や御影堂といった主要堂舎があった「御本寺」と呼ばれる山科本願寺の中核部です。この石風呂は半地下式構造で、大きさは東西約4.4m、南北約6.0mあります。内部は石列で仕切られ、北側の作業場を兼ねた前室と南側の蒸し風呂部に分かれています。

す。蒸し風呂部は花崗岩の石組みで、床は土間となっており、石と粘土で固めたドーム状の天井が架かっていたと考えられます。前室は河原石の石積みで、東側には階段が付きます。このような石風呂が発掘調査で見つかったのは初めてです。では、この石風呂はどのように使用され、誰が使ったものだったのでしょうか。

現存する石風呂 発掘調査で石風呂が見つかったのは初めてです

が、現在でも使用されている石風呂、あるいは文化財として保存されている石風呂が西日本を中心に分布しています。そのうちのひとつが京都市の「八瀬かまぶろ」です。八瀬かまぶろの成立は白鳳時代以来まで遡るとの伝説もありますが、瀬戸内海沿岸に多く残る中世の石風呂の系譜を引くものと考えられ、現在は復元されたものが京都市登録有形民俗文化財となっています。高さ約2m、幅約3.5mあり、内

部の面積は約3.2㎡あります。壁は粘土と石で固められ、床には石が敷き詰められています。天井はドーム状になっており、この室の中に生の青木を入れて燃やした後、燃えかすを掻き出し、そこに箆を敷いて塩水をかけて蒸気を発生させて入り、汗を流すことで療養・保養を目的としたとされています。

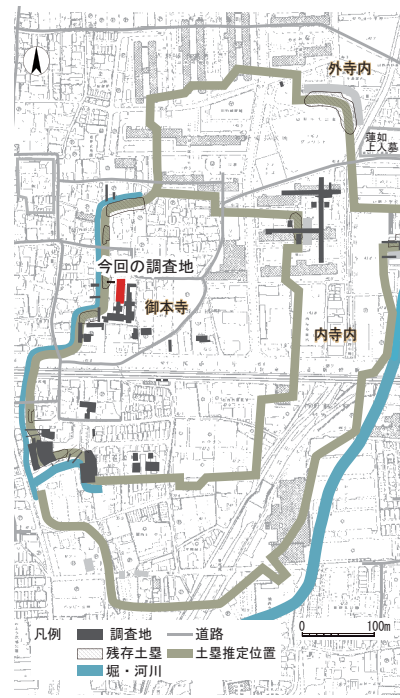
また、先述した瀬戸内海沿岸に残る石風呂も室の中で松の枝葉などを燃やした後、海水をかけた海藻などを敷いて湯気をたてる方式のものです。山科本願寺の石風呂もこれと同じようにして熱気浴を行なったものと考えられます。調査では、石風呂の東側で半地下式のカマドが見つかり、さらにその北側には井戸がありました。石風呂でかいた汗を、カマドで沸かした井戸水で流したのではないのでしょうか。

誰が使ったのか 蓮如上人の跡を継ぎ本願寺第9世となった実如上人が大永5年(1525)に亡くなった際の葬送中陰記録である『じつによ実如上しょうにん人にん闍維中陰録』には、次のよう

な記載があります。

「一、廿日風呂アリ。土呂殿ヨリ御焼候。又寺内七郷ノ風呂ヲモ悉御焼候也。」これによれば「土呂殿」と呼ばれる本願寺の風呂と「寺内七郷ノ風呂」があり、それらを同じ日に「焼」していることがわかります。今回見つかった風呂は「御本寺」内に位置することから、まさしくこの「土呂殿」である可能性が高く、また風呂を「焚」ではなく「焼」と表現しており、石風呂の室の中で木を燃やすことを表現しているのではないかと推測されます。さらにこの史料からは、宗主一族と門徒が同じ日に風呂に入ることで、精神的な結びつきを強めようとした意図が読み取れます。その強固な連帯感が本願寺に繁栄をもたらした要因の一つとすれば、この石風呂は本願寺にとって極めて重要な遺構といえるでしょう。

もうひとつ、蓮如上人の息子の実悟によって天正8年(1580)に記された本願寺の故実書である『本願寺作法之次第』にも、山科本願



山科本願寺と調査位置

寺の風呂の様子が具体的に記されています。それには、毎月1回、25日と28日の月替わりで風呂が立てられ、また客人があった時はそれ以外でも臨時に風呂が立てられました。風呂の入口は二つあり、宗主を指す御住持ごじゅうじや五山の長老といった身分の高い人が使う入口とそれ以外の者が使う入口がありました。また、宗主や客人以外には、本願寺の一門である一家衆いっけしゅうや重臣あかの御内衆が入り、一家衆は垢を掻かせるために家来を一人連れて入ったということなどが書かれています。

ここに記された風呂は、おそらく今回見つかった石風呂のことであり、この風呂が宗主一族や重臣、高貴な客人など限られた者しか利用できない重要な風呂であったことがわかります。蓮如上人もこの石風呂を利用した可能性は極めて高いといえるでしょう。



左京区八瀬近衛町に現存する「八瀬かまぶろ」(京都市登録有形民俗文化財)

(柏田有香)